大分合同新
ワークシート

年　　組　　氏名

大分合同新聞 2023年10月31日（火）朝刊 1面

県内の子牛価格下落

16年度から36万円下がり平均45万円

和牛 物価高で消費減

大分県内の家畜市場で肉用子牛の価格が下落している。10月に売買された1頭当たりの平均は45万6275円で、2016年度のピークに比べ36万円値下がりした。円安による輸入飼料の高騰に加え、物価高で値段の張る和牛の消費が振るわず、子牛を買って育てる農家の購買意欲が落ちていることが原因だ。県内は子牛の生産農家が多く、「赤字続きでやれなくなる」と悲痛な声が出ている。

12日にあったJA全農おおいた豊後玖珠家畜市場（玖珠町大隈）の競りで、取引が成立した362頭の平均価格は43万7994円だった。1カ月前に比べ約3万4千円下がり、1年前からは約8万4千円も落ち込んだ。

16～21年度は約70万～80万円の高値で安定していたものの、ウクライナ危機や円安による輸入飼料の高騰などで市場が冷え込んだ。

玖珠町森の宿利英治さん(77)が出品した2頭はそれぞれ40万円を割り込み、損失が出てしまった。「年金収入で穴埋めしなければならない」と頭を抱える。

約30頭を飼育する宿利さんの農場の餌代は年間約200万円かかり、ウクライナ危機前の21年に比べて1・5倍に増えた。その他の経費も含めて、売り値は雄牛（去勢）が50万円、雌牛は40万円を確保できないと「赤字になる」という。

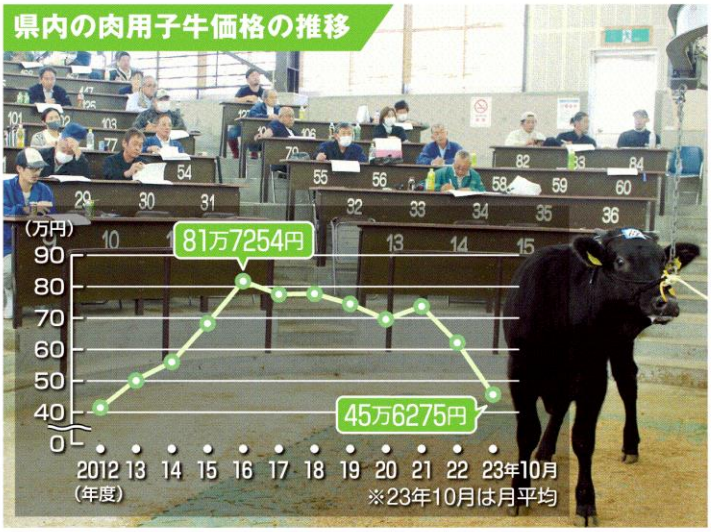
物価高は国産牛の消費低迷を招いている。子牛を買って育て、大阪の焼き肉店や東京の量販店などに枝肉として出荷する匠牧場（杵築市山香町野原）の片桐和彦社長(56)は「消費者の財布のひもは固い。全国で和牛の数はだぶついており、子牛価格はまだ下がるだろう」とみている。

農林水産省は今年、子牛を売る農家の支援強化に乗り出した。4～6月は販売した黒毛和種1頭当たり1万5千円を補塡（ほてん）し、7～9月は8万2千円に拡充した。農家が自前で飼料を調達できるよう対策を進めてきた県も、補助金など直接支援の検討を始めた。

生産者からは「一時的な支援策では焼け石に水だ。高く売れる環境を整えてほしい」との声もある。

武石秀一県畜産振興課長(60)は「消費拡大に努め、資金繰りが苦しい農家の相談には積極的に対応する。できる限りのことをして支えたい」と述べた。

（佐藤章史）



家畜市場で買い付ける子牛を見定める農家＝玖珠町大隈

メモ

県内の肉用牛農家は子牛の「繁殖農家」が約千戸、子牛を買って育てる「肥育農家」が約200戸。両方に取り組む生産者もいる。家畜市場は玖珠町と竹田市の2カ所で、それぞれ毎月1回、子牛の競りを開く。訪れるのは佐賀、宮崎など県外の生産者の割合が高い。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新
ワークシート

年　　組　　氏名

大分合同新聞 2023年10月31日（火）朝刊 1面

〔問①〕県内の家畜市場で肉用子牛の価格が下落しています。どのような原因が考えられますか。

〔問②〕12日、豊後玖珠家畜市場で取引が成立した362頭の平均価格は43万7994円でした。１年前に比べていくら落ち込みましたか。

答え【　　】

〔問③〕餌代が増える原因となっている世界情勢は何ですか。

答え【　　】

〔問④〕国は子牛を売る農家の支援強化に乗り出しましたが、農家からは「一時的な支援策では焼け石に水」との声が上がっています。高く売れる環境を作るには、消費拡大が不可欠です。皆さんが国の担当者ならどのような支援策を考えますか？

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。